



TITLE:

シンガポールのマレー・ムスリム からみたナドラ問題

AUTHOR(S):

坪井, 祐司

CITATION:

坪井, 祐司. シンガポールのマレー・ムスリムからみたナドラ問題. CIAS discussion paper No.19: 「カラム」の時代II-マレー・イスラム世界における公共領域の再編 2011, 19: 17-24

ISSUE DATE:

2011-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/228448>

RIGHT:

© Center for Integrated Area Studies (CIAS), Kyoto University

シンガポールのマレー・ムスリムからみたナドラ問題

坪井 祐司

1. はじめに

本論は、『カラム』誌に掲載されたナドラ (Nadrah) 問題に関する論評を題材に、シンガポールのマレー・ムスリムの視角からみたこの問題の意義を再検討することを試みる。

ナドラ問題とは、第二次大戦中にオランダ人キリスト教徒の両親からムスリムに養子に出された女性 (ムスリム名ナドラ) の両親への引き渡しをめぐる裁判と、その結果として1950年12月に起こったシンガポールにおけるムスリムの暴動事件である。この問題は、シンガポールにおけるムスリムの法的地位をめぐる広範な議論を含んでいただけでなく、マラヤのマレー・ムスリムをも巻き込んで展開された政治史上の一大事件であった。

このため、ナドラ問題は現在においても関心が高い。この問題をめぐっては、[Hughes 1980]、[Haja Maideen 2000]、[Fatini 2010] などの研究において事件の詳細な経緯が明らかにされている¹。一方で、この問題をシンガポールにおける政府当局とマイノリティであるムスリムとの関係という視角からとらえた [Elina 2006]、[Syed Muhd Khairudin 2009] といった研究もある。

本論では、『カラム』誌の論説を通じてナドラ問題を整理する。『カラム』には、1950～51年にナドラ問題を主題とした3点の記事が確認できる。第2号 (1950年9月)、第6号 (1951年1月) に同じ題名「ナドラ：騒動を巻き起こした養子」という記事が書かれ、第7号 (1951年2月) には「ムスリムの地位とナドラ問題における UMNO²の決定」という記事が掲載された。著者

はいずれも『カラム』主筆のアフマド・ルトフィ (Ahmad Lutfi)³である。一連の論説は、当時のシンガポールにおける左派のムスリム知識人の見解を代表するものであろう。このほかにも、1950後半から51年前半にかけてはナドラ問題や女性の結婚や権利を扱った記事がいくつもみられる (表参照)。

本論では、第二節でナドラ問題の経過を述べたあと、第三節、第四節にて『カラム』におけるこの問題の論説を紹介する。そして、第五節でナドラ問題およびそれに関する『カラム』誌の論説の位置づけについて考察することとしたい。

2. ナドラ問題の経過

本節ではナドラ問題の裁判から暴動事件に至る過程を整理する。これについてはすでに先行研究にて詳細が明らかにされているため、ここでは [Haja Maideen 2000] に依拠しながら時系列順に経過を述べることにしたい。

マリア (Maria、のちのナドラ) は1937年3月24日に西ジャワ・バンドン近郊で生まれた。父アドリアヌス・ヘルトホ (Adrianus Hertogh) はオランダの陸軍軍人であった。母アデレーヌ (Adelaine) はジャワ生まれであり、母方の祖母ルイズ (Louise) はユーラシアン (欧亜混血者) で、パンサワン (マレー語の歌劇) の女優であった。ルイズはアデレーヌの父と離婚後ムスリムと再婚し、アデレーヌの兄はイスラムに改宗しスワルディ (Soewardi) と名乗った。アデレーヌ自身もインドネシア語ができた。マリアの生育環境はオランダ的というよりはインドネシア的な色彩が強かった。

マリアとのちに養母となるアミナ (Aminah) は祖母

1 [Hughes 1980] は当時ナドラを保護していたシンガポール社会福祉局のスタッフによって書かれた記録である。[Haja Maideen 2000]、[Fatini 2010] は当事者への聞き取りなどにより時系列に問題の展開を整理している。

2 UMNOの正式名称は統一マレー人国民組織 (United Malays National Organization) であり、1946年に結成され、マラヤにおける脱植民地化過程でマレー・ナショナリズムを主導したマ

レー人政党である。UMNOとナドラ問題の関係については第三節以降を参照。

3 アフマド・ルトフィはカリマンタン・バンジャルマシシ生まれのアラブ人である。シンガポールでジャーナリストとして活躍し、出版者カラムを立ちあげた。彼はマレー民族よりもムスリムの連帯を強調しており、左派の論客と位置付けられる [山本2002: 260-61]。

表 関連記事一覧

号	年	月	頁	題名	著者
2	1950	9	29	ナドラ：騒動を巻き起こした養子 (Nadrah: Anak Angkat yang Menggamparkan)	Ahmad Lutfi
3	1950	10	15	レイコックはイスラムの感情を決起させた (Laycock Membangkitkan Perasaan Islam)	Ahmad Lutfi
4	1950	11	12	成人後の女性 (Perempuan Sesudah Baligh)	Um Muhsin
5	1950	12	5	我々はどこへ連れて行かれるのか？ (ke mana kita hendak dibawa…?)	Ahmad Lutfi
5	1950	12	19	女性の自由とは何か (Apa Dia Kebebasan Perempuan)	Um Muhsin
6	1951	1	6	我々はどこへ連れて行かれるのか？ (ke mana kita hendak dibawa…?)	Edrus
6	1951	1	15	ナドラ——騒動を巻き起こした養子：不満による暴動、流血 (Nadrah – Anak Angkat yang Menggamparkan: Rusuhan dan Tumpah Darah Kerana Tak Puashati)	Ahmad Lutfi
6	1951	1	22	ナドラのために！ 不満が引き起こした暴動 (Keranameu Nadrah! Rusuhan Berbangkit Kerana Tak Puashati) ※写真記事	
6	1951	1	40	女性の財産権 (Hak Perempuan atas Hartanya)	Um Muhsin
7	1951	2	17	我々が検討すべき問題：ムスリムの地位とナドラ問題における UMNO の決定 (Masalah Kita yang Wajib Dikaji: Kedudukan Kaum Muslimin dengan Keputusan UMNO dalam Perkara Nadrah)	Edrus
7	1951	2	35	離婚とそれに関する問題 (Talak dan Hal Ehwal yang Berkenaan dengannya)	Um Muhsin
8	1951	3	34	女性の権利と自由 (hak dan kebebasan perempuan)	Um Muhsin

を通じて知りあった。彼女はマレー半島・トレンガヌのクママン (Kemaman) の良家の出身であり、トレンガヌのスルタンの秘書官と結婚し、日本にも滞在経験があった。その夫に先立たれると、彼女はバンドンの宝石商と結婚した。アミナは以前から知己を得ていたルイズとバンドンで再会し、両者は家族ぐるみのつきあいとなった。

第二次大戦が勃発すると、アドリアヌスは捕虜として抑留された。当時アデレーヌの生活は厳しかったため、マリアは1942年11月15日にアミナに養女として引き取られた。ただし、養子縁組の証拠は叔父のスワルディによるメモのみであり、この手続きがのちに問題となる。マリアはナドラという名を与えられ、以後ムスリムとして育てられた。その後アデレーヌは職を求めてスラバヤへ行き、アミナもバンドンを離れて故郷へと戻ったため、母娘は離ればなれとなった。ナドラはクママンのマレー人カンボンで育てられた。

終戦後、オランダに帰国したナドラの両親はオランダ赤十字を通じて娘を探した。そして、シンガポールのオランダ領事はナドラがクママンにいることを知った。1950年4月、アミナはオランダ領事の求めに応じてナドラを連れてシンガポールにやってきた。オランダ領事はナドラの引き渡しを求めたがアミナが拒否したため、問題はシンガポールの裁判所へと持ち込まれた。これに対して、ムスリム福祉協会 (Muslim Welfare Association) 会長の M.A.マジド (M.A.Majid)⁴ がアミナを支援した。

オランダ領事代理の要求は、未成年者保護条例

(Guardianship of Infants Ordinance) にもとづき、ナドラの引き渡しを求めるものだった。争点は未成年のナドラの養育権が両親か養母かであり、焦点は養子縁組の手続きの正当性であった。公判は5月19日に行われ、裁判長はナドラのオランダの両親への引き渡しを判決し、オランダ領事が身柄を預かることを命じた。オランダ領事はシンガポールの社会福祉局に身柄の保護を委託した。このとき裁判所には数百人のムスリムが集まった。

これに対して、マジドはナドラのオランダ送還の執行の猶予を求め、裁判所の決定に対して控訴した。公判は7月28日に行われ、再びムスリム群衆が裁判所を取り巻いた。再審ではアミナ側が勝訴し、引き渡し命令は破棄された。これは委任状の不備、すなわち両親の供述書に子供の年齢、財産の詳細、親族の名前・住所などが記載されていなかったためであった。この結果、ナドラの身柄はマジド宅に滞在していたアミナのもとに移された。

解放されたナドラは、8月1日にマンスル・アバディという人物と結婚して世間を驚かせた。マンスルはクランタン出身で当時22歳であり、シンガポールの学校で見習い教員を務めていた。十代で父を亡くした彼はムスリム福祉協会およびマジド個人から援助を受けており、福祉協会を手伝っていた際にアミナ、ナドラと知りあった。結婚式では、花嫁の保護者が不在のため、カーディ (Kadi、イスラム法の裁判官) のハジ・アフマド (Haji Ahmad) が代理で保護者を

4 マジドはインド・ムスリムであった。彼は労働組合運動の出身で、1947年に結成されたムスリム福祉協会の会長となった [Haja Maideen 2000: 67]。

務めた。ナドラは当時13歳であり、この結婚の合法性ものに重要な論点となる。

一方で、オランダ領事は8月24日に再び未成年者保護条例にもとづく訴訟を提起した。今回の原告はナドラの両親であり、未成年者であるナドラの結婚の無効を申し立てるものであった。マジドは裁判費用の捻出のため、ムスリム連盟(Muslim League)の代表であるカリム・ガニ(Karim Ghani)に援助を求めた。カリム・ガニはイスラム団体、ムスリムの出版界に影響力を持つ有力者であった⁵。彼の活動に応じて、マレー人左派の政党であるマラヤムラユ民族党(Malay Nationalist Party, MNP)⁶の指導者であったブルハヌッディン・アルヘルミ(Burhanuddin Al-Helmy)⁷などのムスリム知識人が支援を表明した。

11月にナドラの母アデレーヌがオランダから来訪し、アミナ、ナドラと会談したものの和解には至らず、結局法廷闘争となった。公判は11月20日から24日まで行われた。ここでの争点は、第一に養子縁組の合法性、ひいてはナドラがムスリムかどうかであった。両親側はマリアの引き渡しが強要されたものとして、手続きの無効を主張した。第二にナドラとマンスルの結婚の合法性であった。後者に関しては、この結婚にイスラム法が適用されるかという論点を含んでいた。アミナ側は、結婚はムスリム条例(Muslim Ordinance)のもとでカーディがとりおこなったもので、未成年者保護条例で裁くことはできないと主張した。判決は12月2日に言い渡され、オランダ人両親側の勝訴であった。ナドラの身柄はコンベント教会に移された。ムスリム群衆は裁判所をとり囲んで不満を表明した。

しかし、問題はそこにとどまらなかった。12月5日の英語紙シンガポール・スタンダード(Singapore Standard)に、ナドラがコンベント教会で聖母像に跪いている写真が掲載された。ムスリム系の新聞はこれに反発し、12月8日にはムスリム群衆がスルタン・

モスクに集まった。カリム・ガニは「ナドラ行進」というデモ行進を企画し、公職から辞任して、12月9日にナドラ行動委員会(Nadrah Action Committee)を設立した⁸。行進当日の12月11日、高等裁判所前に集まったムスリム群衆が暴徒化し、騒動はムスリム地区一帯へと広がった。この間、マリアは母とともにオランダに向けて出国したが、暴動は3日間続き、18名の死者を出す惨事となった。

当局はムスリム側の指導者を逮捕し、裁判にかけた。この裁判の結果、インド・ムスリム2名とマレー人5名が死刑判決を受けた。結婚をめぐる裁判は控訴されたものの、ナドラがすでに出国してシンガポール在住でないという理由で棄却された⁹。一方で、1951年8月にUMNO党首に就任したアブドゥル・ラーマン(Abdul Rahman)は結婚問題よりも死刑囚の執行阻止に照準をあわせ、減刑を勝ち取った。カリム・ガニは1952年4月に釈放されるとパキスタンに出国した。残りの行動委員会メンバーであるブルハヌッディンなども釈放されたが、厳重な監視下に置かれた。こうしてナドラ問題は鎮静化した。

3. 『カラム』におけるナドラ問題

(1) ナドラ問題をめぐる論点

本節では、『カラム』誌の記事をもとにナドラ事件をめぐる論点を整理する。『カラム』第2号および第6号の論説からは、ムスリムの立場からみたナドラ問題の論点をうかがうことができる。第2号はナドラの裁判や結婚の経過が現在進行形で記述されており、この問題の初期の論点が示されている。12月の暴動後に発行された第6号からは、論点が少しずつ移行していったことがうかがえる。

第2号の記事におけるこの問題の論点は大きく分けて二点である。その第一は、ナドラをめぐるキリスト教徒の両親とムスリムの養母の養育権をめぐる争

5 カリム・ガニはタミル語紙マラヤ・ナンバン(Malaya Namban)の編集者でもあった。インド生まれで、ビルマに長く滞在していたが、第二次大戦中マラヤにわたった。チャンドラ・ボースに協力して戦後投獄されるが、その後釈放され1950年にムスリム連盟代表となった[Haja Maideen 2000: 131]。彼はシンガポールムスリム連盟(Singapore Muslim League)、全マラヤイスラム布教協会(All Malaya Muslim Missionary Society)といったイスラム組織の代表も務めていた[Haja Maideen 2000: 151-153]。

6 マラヤムラユ民族党は1945年10月マラヤ・ペラ州にて設立され、翌年2月にはシンガポール支部が設立された。同党はインドネシアも含めたマレー・ムスリムの幅広い連帯を掲げてUMNOと対立した。なお、同党はマレー語の略称だとPKMM

(Parti Kebangsaan Melayu Malaya)であるが、シンガポールを扱う本稿では英語の略称MNPと表記する。

7 ブルハヌッディンはペラ州のスマトラ・ミナンカバウ移民の家系出身である。イスラム教育を受けた後政治の世界に身を投じ、パレスチナでも活動した。マラヤでは左派のジャーナリストとして活躍し、MNPの結成にあたり副党首となった[Haja Maideen 2000: 141]。

8 ナドラ行動委員会は、カリム・ガニを委員長として、ブルハヌッディンなど元MNP指導者やシンガポールのアラブ人有力者など6名からなっていた[Elina 2006: 329]。

9 マリアはその後オランダで2度の離婚を経験したのちにアメリカに渡るなど波乱に満ちた生涯を送り、2009年に死去した[Fatini 2010]。

いである。ただし、裁判で争点となった養子縁組の手続きの合法性については記事では言及されていない。強調されているのは、アミナにナドラを養育する能力があるという点である。

裁判所は同情を示し、子供を養育する責任を負うことに関してアミナを信頼していることは確かである。法律家の見解によれば、裁判所の処置は、アミナがナドラについて責任を負えると信頼しようとする試みであるということだ[*Qalam* 1950.9: 29]。

第二の論点はナドラの結婚である。ナドラの結婚はシンガポール、マラヤの言論界で大きな論争を巻き起こした。英語紙ストレーツタイムズ(*Straits Times*)などはこの結婚を批判したが、ウトゥサン・ムラユ(*Utusan Melayu*)などのマレー語紙やインド系の新聞は結婚は個人の問題であるとして二人を擁護した[Haja Maideen 2000: 110-111]。

『カラム』2号で問題にされているのはナドラの年齢である。

この国の法律では、女性は両親の保護下では13歳で結婚できるが、個人の自由意志では21歳にならないと結婚できない。しかし、この法律はムスリムには適用されない。ナドラの現在の状況ならば年齢的にマンスル・アバディとの結婚は有効であり、破談させることはできない[*Qalam* 1950.9: 30]。

当時のシンガポールにおける結婚の年齢に関して、キリスト教徒については女性が14歳以上と定められていたが、ムスリムに関しては明確な規定はなかった[Hughes 1980: 42]。このため、この問題に合わせて結婚の最低年齢を16歳とする法案が提出されたが、立法参事会の議論を経てムスリムは適用外とされた[Haja Maideen 2000: 134]。『カラム』でもルトフィが1950年10月の第3号でこの問題を取り上げて法案を批判している[*Qalam* 1950.10: 15-19]。また、1950年11月から52年7月までに「婦人のページ(Halaman Kaum Ibu)」という記事が17回掲載されているが、最初の記事では結婚年齢をめぐるムスリム側の解釈が示されている[*Qalam* 1950.11: 12-16]。

第2号の記事は以下のように続けられている。

ここで問題は難しくなる。ここでアミナさんに同情する人々の一部は、このような野蛮さに不満である。というのは、自由な近代国家においてこれだけ低年齢で結婚するのは反対されることを知っているためだ。とくにナド

ラの状況では、審理はまだ続いている。裁判所の再審決定により、両親がやってきて彼女の身柄の請求を行うことができるためだ[*Qalam* 1950.9: 30]。

この点に関する著者ルトフィの立場は明確にされていないが、この結婚をめぐるのはムスリムの間でも賛否両論があったことがうかがえる。このためか、この記事の結びの部分はやや歯切れが悪くなっている。

この結婚が両親のナドラへの支配からのがれるための手段なのか、自身の意志なのかはわからない。この結婚に関して、これを書いている現在まで、ナドラがどのようなことになるか、彼女の意思に反して両親のもとに引き渡されてしまうのか、要求する側が心が一つに結ばれている養母と養女に配慮するのかわからない。心は引き離すことはできず、もし引き離されたら彼女たちの精神は危険なものになるだろう。これについては、従うべきは法律ではなく、彼女たちに与えられた同情にあふれた感情であるべきだ[*Qalam* 1950.9: 30]。

この第2号の論説の特徴は、ナドラやアミナの個人的な事情に焦点が当たり、二人の女性の困難な状況に対する同情が記事の基調にある点である。改宗、結婚といった個人の私的な行動が公的な法制度により妨げられているというのがこの問題の主要な論点であった。

これに対して、第6号の記事は論調には変化がみられる。議論はナドラの結婚に集中し、行政や法の管轄をめぐるムスリムと植民地当局との関係が問題にされたのである。暴動事件の直後に発行された第6号の論説の序文では、暴動の原因を「ブラウン(T. A. Brown)裁判長がイスラム教徒であるナドラをイスラム教徒でなく、マンスル・アバディとの結婚を無効であり、シンガポール政府から委任を受けたカーディが結婚代理人となれないと裁定したことに対するイスラム教徒の不満」としている[*Qalam* 1951.1: 15]。ここで問題とされているのは、(1)ナドラをイスラム教徒と認定せず、その結婚にイスラム法を適用しなかった判断、(2)イスラム法制度におけるカーディの権限の二点であり、いずれもシンガポールにおけるイスラム法制度の管轄に関わる問題であった。

第一には、ナドラをムスリムと認定するかどうかである。ルトフィは、ナドラの改宗を認めなかった裁判長の裁定について「この国の信教の自由に抵触するものであり、本来あってはならないものであった」と批判している[*Qalam* 1951.1: 16]。ここでの問題はナドラの信仰告白への扱いであり、彼女を成人とみ

なすかどうかであった。

小さい子供の信仰告白は認められないが、成人 (baligh) してからの告白は認められる。告白が認められると人はムスリムとなり、イスラム教から離脱しようという試みがあつた場合、それを止めることはイスラムの教えにもとづくすべてのムスリムの義務である [Qalam 1951.1: 16]。

ここでの「成人」とは、「すべてにおいて独立し、宗教、知恵、慣習において独立が認められている」人間を指し、両親の束縛から自由な存在である [Qalam 1951.1: 17]。

ここで本当にナドラが子供なのかどうかに関する理解や法解釈の齟齬が現れる。イスラム教によればナドラは子供ではない。彼女は成人であり、明らかに自分がムスリムであると告白している。この告白は疑いなくイスラムに受け入れられている [Qalam 1951.1: 17]。

第二の問題は、シンガポールの法制度におけるカーディの権限についてである。ナドラは父が不在のためカーディを後見人 (wali) として結婚したが、この点が裁判の争点となり、ナドラの結婚は認められなかった。カリム・ガニは、イスラム教徒の結婚が世俗の裁判所においてイスラム法を理解しないヨーロッパ人裁判官によって裁かれること自体が許されないと考えていた [Haji Maideen 2000: 170-171]。

シンガポールにおいて、カーディは特に養子が結婚する場合に法定後見人 (wali tahkim) を務めることとなっていた。実父がムスリムでないナドラの場合、ムスリムの委任保護者が必要となる [Qalam 1951.1: 17]。

イスラム教の観点からは、ムスリムは自由に希望する誰とであれ結婚を決めることができ、誰でも希望する人物を結婚のため代理人 (保護者) となる人物を選び、任命することができることが明らかである。宗教が重視する保護者となるのは最優先には父親であり、他の人物は二の次であるが、これは女性の自由を阻害することを意図するものではない。この説明により、いかなる状況であれ、もし女性が成人でイスラム教を告白していて保護者が宗教の違いという理由で絆が切れていれば、彼女はカーディに結婚をとりしめる権限を与えることができることは明らかである [Qalam 1951.1: 17]。

記事の見解に立てば、ナドラは成人なので、自由に保護者を選んで結婚することができる。そして、カー

ディがナドラの保護者となることができ、その結婚も有効である。ただし、この結婚の合法性に関しては、ムスリムの間にも否定的な意見もみられた¹⁰。

この二つの論点はいずれもシンガポールの行政制度におけるイスラムをめぐる管轄に関わるものであった。当初ナドラやアミナの個人をめぐる問題であったが、公共領域におけるムスリムの地位をめぐる問題へと拡大していったといえる。

4. 『カラム』におけるナドラ問題 (2) 政治問題としての側面

ナドラ問題は、裁判や法律をめぐる議論というだけでなく、シンガポールにおけるムスリムの地位をめぐる政治問題でもあり、結末は悲劇的な暴動となった。本節では、主に『カラム』の第6号、第7号の記事からこの問題の政治的な展開について考察する。

裁判が開始された当初から、ナドラ問題はシンガポールの言論界で大きく取りあげられた。第一審でナドラの両親への引き渡しが命じられたとき、多くのムスリムが裁判所に集まった。

この決定が宣告されると、裁判所の前で悲しむべき事件が起こった。ナドラは即座に涙ながらに養母に抱きつき、離れたがらなかったのだ。その泣き声により見ていた人たちは悲しみ、泣いた。彼らは二人の苦しみに同情し、別れを強要される母と娘の感情に思いをはせたのだ。このニュースが新聞で広まると、同情はシンガポールの住民のみならずマレー半島の他地域の人々からも寄せられた。これによりナドラ事件のニュースは大騒動を巻き起こした [Qalam 1950.9: 29]。

以後、この問題の判決のたびにムスリム群衆が裁判所を取り囲んだ。

最終的な判決が出ると、この問題は大規模な暴動へと発展した。「ナドラ行進」に際して、当局はグルカ兵を動員するなど統制を強めたことでかえって事態は統制不可能となった [Qalam 1951.1: 15-16]。第6号の記事では暴動に至る経緯が記されているが、ルトフィによればそのきっかけは英語紙に教会でのナドラの写真が掲載されたことにある。写真によってナドラがあたかもキリスト教に改宗したかのような印

10 第6号の記事では、スランゴル州のイスラム法学者のマフムド・ザディ (Mahmud Zahdi) も結婚は有効と主張したとしているが [Qalam 1951.1: 17]、[Haji Maideen 2000: 172] では原告がマフムド・ザディは結婚を無効とする供述書を出したとされている。

象を与えたというのである。

オランダ領事とナドラの母がナドラをコンベント教会に連れこみ、「シンガポール・スタンダード」紙に写真を流したことでこの怒りは増した。ムスリムにとってこれは起爆剤だった。写真によって彼らの憤怒は頂点に達したのだ [Qalam 1951.1: 15]。

このことは、当時の報道における写真の影響力を示すものといえる。第二次大戦後のこの時期の新聞・雑誌は写真を多く掲載するようになっていた。カラムにも写真をメインとした記事が毎号掲載されているが、第6号ではナドラをめぐる暴動事件が6枚の写真をもとに描写された記事が掲載されている [Qalam 1951.1: 22-23]。

そして、ルトフィは騒動の原因を「政治の拙劣さ」、すなわち当局がイスラム教徒の感情を軽視したことにあると主張する。ムスリム側の不穏な情勢は逐一シンガポール当局者に届けられていたにもかかわらず、当局はそれを軽視したというのである。

当局はこのときたぶんムラユ人の心にあるイスラム魂が決起しないと予想しており、ムスリムがとりわけ宗教について違う姿勢を持っているという当局に届けられた助言を理解しなかった。彼らは自らに対するいかなる負荷にも温厚で、平和的で寛容であるが、この寛容さは宗教への尊重がなされないと失われてしまう。この問題に対し、ムスリムはアラーの宗教の尊厳を守るためには魂を売る気はなく、おそらくこのため我慢できずに、指導もないのにいつもと違い当局を驚かせるような敵対行動をとった。これがムスリムの精神と心をはかる教訓となることを願う [Qalam 1951.1: 16]。

続いて、共産党の武装蜂起により非常事態宣言がなされていたマラヤの状況に言及し、この事件により悪化したイスラム教徒の当局に対する印象を改善するのは当局の重責であると主張した。

政府が注意すべき事とは、イスラム全般に関する決定の影響はイスラムを告白する人間の権利に関わるものであり、イスラム教徒がこの国で信教の自由の境界がどこか、カーディの権限がどこまでかを知るため、このイスラムの結婚の権利は至急説明されるべきであるということである。この決定はその背後の問題群に引用されることになるからである [Qalam 1951.1: 18]。

そして、平和に向けた努力を行うために「指導者 (penganjur)」による委員会を組織することを提案し

てルトフィは第6号の記事を締めくくった。

暴動直後の第7号の記事では、ナドラ問題をマラヤ・シンガポールにおけるムスリムの地位をめぐる政治問題としてとりあげている。この記事において、ルトフィはこの問題を、(1) イスラムの教えに従って十分な資格でイスラム教の信仰を告白した人間の権利が無効にされたこと、(2) カーディが代理人になる権限が取り消されたこと、(3) イスラム法によって合法的なイスラム教との結婚が否定されたこと、と整理した。

そのすべては、ムスリムの観察によれば、彼らに付与されていた信教の自由が崩壊したことを意味する。これは今シンガポールで起こっているが、やがてはマラヤでも起こるに違いない。このため、針が通す突破口となって将来ナドラのような問題がたくさん起こり、より深刻なものとならないように、彼らはこの問題を重視して正当な関心を得ることを望んでいる [Qalam 1951.2: 17]。

それとともに、ルトフィはこの問題に関して深入りを避けた UMNO の姿勢を批判した。第7号の記事の序文では、以下のように述べられている。

ナドラ問題は民族やイスラムをめぐる問題ではなく、裁判所の問題であるという UMNO の決定は、この問題が非常に敏感な宗教の問題であるとみなすイスラム教徒 (Umat Islam) および一部の UMNO 党員の不安を掻き立てた [Qalam 1951.2: 17]。

UMNO は、この問題の当初からマレー人左派とは一線を画していた。他のムスリム団体が抗議を行うなか、ダト・オン率いる UMNO はこの問題を「審理中」として静観の姿勢をとった。1950年8月、UMNO の大会で婦人部がナドラ事件への関与を求めたが、ダト・オンは介入しなかった。UMNO のなかでも、のちに党首となるアブドゥル・ラーマンは介入を求めてオンと会談したものの、オンは態度を変えず、アブドゥル・ラーマンはこれに失望したという [Haja Maideen 2000: 227-228]。

ルトフィは、もともと UMNO は宗教と民族を基盤として結成されたが、近年宗教の比重が下がっていると指摘した。そして、「UMNO が宗教関連の分野に他の分野と比べてきわめて少ない予算しか割いていないことからこの問題は明らかである」と述べている [Qalam 1951.2: 17]。その状況で起こったナドラ問題に対する UMNO の消極的な姿勢は宗教軽視の典型とみなされ、左派からの批判の格好の題材となった。

ルトフィは、記事のなかで UMNO に代わるイスラム団体を組織することを主張した。

我々は UMNO が思いを実現し、法律にのっとって宗教の利益を守るために頼りにならないことを知ったが、現在マラヤでは大波となっており、いま起こっていることは UMNO の当初の基本原則の変更である。イスラム指導者にとって重要となっているのは、当初 UMNO の結成されたときのように、UMNO の内部であれ外部であれ、イスラムの地位が他と比べて重視されるためにはどのような道をとるべきかを考えるということだ。もし UMNO 内部の宗教を愛する人々が現在の状況を変えられないなら、新しいムスリムの政治組織を結成する時が来ているのだと考える [Qalam 1951.2: 19]。

ここにきて、ナドラ問題はマラヤ・シンガポールにおける当局とムスリムの関係、マレー・ムスリム内部の右派・左派の対立関係をめぐる問題となり、さらなる拡大をみせていることがわかる。

5. シンガポールのマレー・ムスリムからみたナドラ問題

本節では、マラヤ・シンガポールの歴史的文脈におけるナドラ問題の意義を再考し、第三、四節で整理した『カラム』におけるナドラ問題の論説の位置づけについて考察する。

ナドラ問題は、マラヤ・シンガポールのマレー・ナショナリズム運動における一つの転機であった。第二次大戦後、1946年のマラヤ連合の成立によりシンガポールはマラヤと行政的に分離され、イギリスの直轄領となった。非マレー人のムスリムの多いシンガポールでは、地域を越えたマレー・ムスリムの連帯を重視する MNP など左派の主導権が握った。マラヤにおいてマラヤ連合への反対から UMNO が結成された時、MNP は加わらなかった。MNP はシンガポールとマラヤの分離にも反対しており、反イギリスの姿勢を明確にした。マラヤにおいて共産党の蜂起が起こり、非常事態宣言 (1948年6月) が布告されると、MNP は非合法化された。

一方で、非常事態による締め付けはマラヤの方が厳しかったため、半島部の MNP 党員がシンガポールに流入した。MNP のシンガポール支部は解散したが、1950年の12月に起こった暴動では、元 MNP 党員が大きな役割を果たしたとされる。加えて、ナドラ問題に関与したムスリムにはインド・ムスリムやインドネ

シア系のマレー人が多く含まれていた。暴動事件の結果、多くのムスリム指導者が逮捕され、シンガポールで主導権を握っていた左派やイスラムの勢力が後退した。1951年12月にシンガポールにも UMNO の支部が設立されるなど、これ以降穏健派が主導権を握ることとなった [Elina 2006: 330]。ナドラ問題は、マラヤにおいてマレー人という民族を前面に出したマレー・ナショナリズムが優勢となり、シンガポールに代表される左派、イスラム勢力が影響力を失う流れのなかの象徴的な事件といえる。

それでは、『カラム』誌の言論活動においてこの事件はどのような意味を持っていたのだろうか。筆者は、前著で同誌の「祖国情勢」というコラムの分析を通じて、その全体の傾向を分析した [坪井 2010]。「祖国情勢」は、複数の執筆者が「祖国」マラヤの政治問題について論じたコラムである。1950、51年の「祖国情勢」においてはルトフィやブルハヌッディンらによる左派的な論説が主体であり、UMNO やダト・オンを批判していた¹¹。本論で取りあげた第7号の記事も「祖国情勢」の一つであり、前述のように UMNO にかわるイスラム組織の結成が主張された。ナドラ問題とそれにとまなうルトフィの UMNO 批判は、UMNO のマラヤのマレー人という統合とは違うイスラムを軸とした統合を志向する観点からなされたものといえる。

しかし、1951～52年は、『カラム』の「祖国情勢」の転換点でもあった。52年以降はルトフィやブルハヌッディンはこのコラムを担当しなくなり、その主張も UMNO に代表される右派の論調に重なるものが多くなっていった [坪井 2010: 12-14]。『カラム』の主筆であるルトフィはその後も記事は書き続けるが、その内容はインドネシアに関する記事やイスラムに関する記事が多くなり、正面から「祖国」マラヤの政治を扱う記事は少なくなる。このことは、ルトフィおよび『カラム』がマラヤ・シンガポールの情勢の変化をふまえて、左派の視点からの UMNO 批判だけでなく戦略を多様化させたことを意味するのではないか。このことから、この時期は『カラム』誌全体にとっても一つの転機であったといえるのではなからうか。

11 当時ダト・オンは UMNO の党員資格を非マレー人も開放する構想を抱いており、彼らはダト・オンがマレー人をマラヤ人 (Malayan) にしようとしていると批判した [坪井 2010: 10-12]。このダト・オンの構想に対しては UMNO 内部の反発も強く、ダト・オンは1951年8月に党首を辞任し離党した。

おわりに

本論は、ナドラ問題の経過を整理し、これ問題をめぐる『カラム』誌の論説を分析した。そこから明らかとなった点は以下のとおりである。

第一に、ナドラ問題の焦点がシンガポールの国家体制におけるムスリムの改宗、結婚、裁判の管轄権にあったという点である。シンガポールやマラヤのマレー・ムスリムにとって宗教、民族、法的地位は密接に結びついており、個人が改宗や結婚によりこの境界を越えようとする社会全体の問題へと発展する。これは、シンガポール、マレーシアにおいては現在の課題でもある。

第二に、ナドラ問題はシンガポール政治史上の一事件というだけでなく、マレー・ナショナリズム運動の一つの転機でもあったという点である。この問題において UMNO は積極的な対応をとらず、イスラムの連帯を強調する急進派とは一線を画した。この事件を契機にイスラム勢力は後退し、UMNO に代表されるマレー民族を前面に出す穏健派勢力がマラヤにおけるナショナリズムの主流となった。

第三に、そうした視点から『カラム』をみると、『カラム』にとってもナドラ問題は一つの転機となったのではないかという点である。コラム「祖国情勢」の著者も代わり、論調がより多様化していく契機となった可能性がある。ただし、このことを明らかにするためには、1950年代前半における『カラム』の論調をより詳しく分析していく必要がある。また、その作業は『カラム』のシンガポールのムスリム社会における位置づけをより明確にしていくことにもつながるのではないだろうか。

参考文献

- Elina Abdullah. 2006. "The Political Activities of the Singapore Malays, 1945-1959", in Khoo Kay Kim et al (ed). *Malays/Muslims in Singapore: Selected Reading in History 1819-1965*. Subang Jaya: Pelanduk Publications, pp.315-354.
- Fatini Yaacob. 2010. *Natrah (1937-2009): Nadra@Huberdina Maria Hertogh @ Bertha, Cinta, Rusuhan, Air Mata*. Kuala Lumpur: Penerbit UTM.
- Haja Maideen. 2000. *The Nadra Tragedy: The Maria Hertogh Controversy (new edition)*. Kuala Lumpur:

Pelanduk.

Hughes, T.E. 1980. *Tangled worlds: the story of Maria Hertogh*. Singapore: Institute of South East Asian Studies.

Syed Muhd Khairudin Aljunied. 2009. *Colonialism, violence and Muslims in Southeast Asia : the Maria Hertogh controversy and its aftermath*. Abindon: Routledge.

坪井祐司 2010「コラム「祖国情勢」に関するノート」
山本博之編『『カラム』の時代：マレー・イスラム世界の「近代」』京都大学地域研究統合情報センター、pp.10-17。

山本博之 2002「資料紹介『カラム』」『上智アジア学』、20: 259-343。